

地域と自分のかかわり ～一年間で見つけたこと～

社会福祉学部 社会福祉学科 2年 加藤翼

活動先：特定非営利活動法人ひだまり

担当教員：岡久美子

1. 計画の大切さ・企画の大切さ

私が、一年間の学びで成長したなど感じたことは、さまざまな計画を作り、その計画を行うには、さまざまなリスクがあることを考えていかなければならないことである。何かの企画をやろうと考えた場合、この作業にはどれくらいの時間がかかるか、必要なものはなんだろうか、そもそもこの企画はみんなができるだろうかを想定しなければならない。

特定非営利活動法人ひだまりでのサービスマーケティングで私は、うちわ作りを行った。うちわはすぐに作れてしまいそうなので、早い人は半日で終わってしまうかなと思っていた。しかし、実際にうちわ作りを始めてみると、ほとんどの利用者さんがうちわを作るのに、1日かかってしまった。さらに、1日だけでは終わらない人も多くいて、少し驚いた。

活動先からのアドバイスで、利用者さんの身体能力や性格によって、作業の進め方はぜんぜん違う、というアドバイスをいただき、気づいたことがあった。企画を作るとき、自分たちでもできるから、ほかの人にもできるだろうという考えである。うちわを作るシュミレーションをして、自分たちでもすぐに作ることができたから、利用者さんもすぐにできるだろうと思っていたが、作ってみるとうちわに貼る画用紙を切るペースが少し遅い、うちわに描こうと思っている絵が思い浮かばない、なかなか描く絵が決まらない、身体能力によってうちわを作ることが難しいなど相手のことをあまり想定していなかったのである。

企画は、相手を楽しくさせるものであるから、自分でシュミレーションを行うことも大切であるが、まずは相手のことをしっかり想定しながら計画していかなければいけないと思った。

企画は失敗してしまったが、私にとっては成功したと思っている企画がある。それは、もやし栽培企画である。

もやし栽培企画は、インターネットで暗闇においておけば、数週間ででき作り方も簡単であると知り計画をした。しかし、もやしは、気温、湿度が整っていることや真っ暗な空間においておかなければならないなどの育つ条件があり、育つ条件が合わず、ほとんどのもやしは腐ってしまった。

利用者さんは、もよしの生長を楽しみにしていた方が多く、失敗してしまったと伝えると少しがっかりしていた。がっかりしていたが、利用者さんはまたリベンジするかと言ってくれた。理由は、生長を見るのが楽しいからと言ってくれた。自分がまいた種の生長を見ているので日に日に変わる姿を楽しいと聞き、植物の生長過程を見ていることでも人は楽しみ方を見つけるのだなと思った。もやし栽培企画だけでなく、別の植物栽培企画を計画してみて、もやしとは違った生長過程を楽しみのひとつにあるのではないかなと考えた。

2. 地域や市民活動の現状や課題

活動を通して見えてきた地域や市民活動の現状や課題について感じたことは、何かを行

うときには必ず、お金が必要になってくることである。新しく NPO を設立しようと思ってもお金がかかる、何か企画するときにも必要なものを買うときに使うなどたくさんのお金が必要になってくる。私は、報告会で、NPO の運営するための資金調達の方法について調べ、NPO の資金調達の方法はとても難しいものだなと思った。

寄付や会費などは大きな金額が集まらないし、補助金や助成金、委託事業収入なども毎回もらえるわけではないので、お金が集まらないかもしれない。NPO は、高いリスクがついてくるとわかりながらも事業収入でお金を集めているのだなと知った。

空き家の再利用についても私は、お金の問題と密接に関わっていると思う。建物をはじめから作ると、土地の問題、建物を一から作る作業の問題などさまざまなお金がかかってくる。空き家の再利用をすると、お金の負担が少し減る、地域の社会資源の活用ができることなど、メリットが大きいのである。また、特定非営利活動法人 ひだまりのようにアットホームな雰囲気を出すことができ、人々に寄り添った環境を作ることができる。空き家を利用すると、運営側だけにメリットがあるわけではなく、利用者側にもメリットがあるから増えてきているのだと思った。

私は、NPO の活動がもっと広まればいいなと思っている。私もはじめは、NPO はどんな活動をしているのか知らないことや、喫茶店や商品販売などで収入を得て、運営資金にしていることも始めて知った。NPO は増えつつあるが、活動を知らない人も多くいると思う。たくさんの方が知ることによって、寄付が多く集まったり、空いている空き家が見つかるなど、お金の問題をサポートしていくのが、課題の解決につながるのではないかなと考えている。

自分の可能性と限界

社会福祉学部 社会福祉学科 2年 徳田 里紗

活動先：特定非営利活動法人ひだまり

担当教員：岡久美子

①自分の成長と気づきについて

成長した事として、まずは「何事にも積極的に深めていく」「共に生きる」ことができ、学べるようになったと感じる。なぜなら今回のサービ斯拉ーニングで企画書を事前に施設へ提出したり、打ち合わせを行ったりなど、今までの学生生活ではほとんど担当教員に任せていた先方とのやり取りを行って来て、相手に自分の意志を伝えるためには積極的になり、伝えたい出来事に対して知識を深めていく事が必要だと感じた。サービ斯拉ーニングでは何をしたいのか、何が必要なのかインターネットや実際に必要な用具を確認したりなどして下調べを行うなど自分でやらなくてはならないことがたくさんあり、とても良い学び、経験ができた。私は認知症の方が比較的多いNPO法人ひだまりのデイサービスでサービ斯拉ーニングをさせて頂いたが、利用者様とのレクリエーションやコミュニケーションを通して利用者様の普段の様子や施設の利用者同士の会話などを実際に聞き、特に私は「ここにくると話ができるし、何より皆さんの顔がみられる」と利用者様皆様が口を揃えておっしゃっていて同じ地域に住む者同士互いに助け合っているのだと実感した。一年間を通して気づいた事は自分たちにできる可能性と限界についてである。サービ斯拉ーニングでは、施設の方々の協力があつたからこそ実行することができた。自分たちは出来る限りの準備を行ってきたつもりだが、やはり4人しか実習生がいなかったために利用者様1人ひとりに対応することが困難であったことや材料が足りない、作業の内容を実習生同士でしっかり共通の認識ができていないなどの部分や利用者様があまり乗り気ではなかったことや、もやしを栽培しようとしたが失敗してしまった事など予期せぬ出来事があったりなど自分達では達成できなかったのではないかと、できることの限界を感じた。今回の限界を今後でどう対応していくか、何処まで可能性を広げられるかが課題だと感じた。

②活動を通して見えてきた地域や市民活動の現状や課題について

活動を通して、活動先はあまり地域交流が盛んではなく、内輪で活動をしているように感じた。実際に職員の方に尋ねると「少人数規模であるが為に、地域で呼びかけてもなかなか声が届かないのが現状」とおっしゃっていた。地域社会とのつながりを作っていく事は困難なことであると初めて知った。他の活動先ではフェスタや地域住民を呼んだ夏祭りなどのイベントを行っていたが、ほとんどが大きい法人であった。小規模であっても地域で積極的に活動できるような取り組みが今後の課題であると感じた。後期では、前期のサービ斯拉ーニングでの活動の中で感じた他にはどのような分野のNPOが地域にあるのかという疑問から児童分野である「不登校」についての研究を行った。不登校は身近なものであり、地域の中で支えていくべきものであると私は感じていたが、不登校支援を行っているNPOは地域にたくさんあるわけではないと研究の中で学んだ。不登校問題だけではなく、地域や地域住民がNPOの名前は聞いた事があってもなかなか支援をするという段階までには達しないのではないかとこの一年の活動を通して感じた。自分自身もNPOに

実際に実習するまで特に興味・関心を持っていなかった。まずはNPOとはどのようなものであるのか、いかに住民 1 人ひとりの力が必要であることを理解してもらい、今後もっとNPOに参加してもらい、人材不足を解消、そしてよりよいサービスの提供に努めることが必要だと感じた。地域で活動していくためには、経営している施設に関する人々の力だけでは限界がある。その限界を打破するためにも地域や地域住民と連携していき協働していく事が今後の課題だと感じた。



地域で活躍できる人物になるために

社会福祉学部 社会福祉学科 2年 内藤健太

活動先：特定非営利活動法人ひだまり

担当教員：岡久美子

はじめに

市民とは地域とはなんなのか。このゼミでの一年間の活動を通し、地域とは市民とは？このことをテーマに、活動や研究など様々な活動を行ってきた。

地域で活躍する人物になるために自分が成し遂げた成長や、実際の活動を通して見えた地域を振り返り今後の学習に活かしていきたいと思う。

1.成長と気づき

私がサービスマネジメントを通して成長した点について3つ挙げる事ができる。

1つめは企画を立てていく力がついたことである。これはNPOへの活動をとおしてつけたものだと思う。私たちのグループは小規模多機能施設特定非営利活動法人ひだまりでの活動を行った。その際、活動中に行うレクリエーションを始めとする施設内での企画をすることになった。はじめはどんなことをすれば良いかに焦点を集めすぎてしまいなかなか企画が決まらなかった。しかし、施設の方々との話し合いや事前の調査を進めていくなかで何が出来るのかを重点に置いたレクリエーションを進めることができ、企画したことの殆んどが成功できた。事前の連絡調整や下調べは福祉の仕事に限ったことでなく、どのようなものにも当たり前のようにならなければならない。今回の企画を立てていく力を今後も活かしていきたい。

2つめは地域に対する課題を発見していく力がついたことである。

私は活動にむけての地域にある課題として初めは高齢化に対する部分やそれに伴う介護負担のみに焦点を当て、課題を見つけていた。しかし実際の現場や振り返り学習をすると、私の学習を行った場所の課題は高齢化に対する問題だけでなく他にも気づいた。例えばNPO活動の認知という点が挙げられる。私が活動を行ったNPO法人は地域密着型老人ホーム以外にも半田図書館内での喫茶店を運営するなど事業の拡大を行っている。しかしながら法人の認知に関してはなかなか広がっていかないのが現実にあるという。それゆえに、法人の運営が難しくなったり、施設の充実化を図れないことがあるそうだ。市民活動やNPOの認知というのはまだまだ課題が山積みであるということがわかった。

これ以外にも空き家に対しての地域課題にも着目することができた。私の活動をした場所は空き家を福祉施設として転用したものであった。空き家を福祉として利用することには様々なメリット・デメリットがあることを活動中に実感し、後期のゼミ研究では空き家の福祉転用についてを研究した。調べを進めると福祉転用が地域でなぜ望まれるのかや、それに伴う日本の人口減少や少子高齢化、福祉施設の増加要求、空き家問題など、ミクロな一つのテーマからマクロレベルからメゾレベルまでの幅広い課題を発見することができた。ゼミ研究の最後には今できる小さな課題解決の提案を発表した。私は、こうした小さな課題解決こそが地域や市民活動の大きな飛躍になると思う。これからも地域にある小さな課題から解決に向け自分にはなにが果たせるのかを学んでいきたいと思う。

3つめは課題の原因を追求する力がついたことである。これは後期のゼミ研究を通して成

長を感じたものである。空き家の福祉転用を研究する際、課題のみにとらわれるのではなく、その課題が発生する原因について文献、web、フィールドワーク調査などで深く追求した。調べてみると前述のように様々な小さな課題が蓄積され空き家に対する課題と福祉施設としての課題が複雑に交わりあいながら大きな課題となっていることがわかった。原因を探ることはこうした様々な課題を引き付けることができることがわかり、課題の原因追求に対する面白さにも気づけたと思う。またこのスキルは相談援助にも役立てられるとも思った。例えばクライアントがなにか課題をもっていたとして、その課題の事象だけをみるのではなく、そこまでに至った経緯を見ればより、クライアントに寄り添った相談援助が成し遂げられるのではないかと思う。このように原因追求のスキルは今後あらゆる場面で役に立っていくと思う。これから大事にしていきたいと思った。

2.活動を通して見えた地域や市民活動の現状、課題

活動を通して見えた地域や市民活動の現状、課題としてこうしたことの社会的認知がまだ行き届いてないことが挙げられる。私が活動をおこなったひだまりは地域密着型の老人ホーム以外にも喫茶事業を行っており活動の幅を広げていたが、なかなか地域の人に活動を認知してもらうことができないという話をきいた。またゼミ報告会でも NPO の認知やそれに関わる資金繰りや活動の誤解を生むなど課題についてをテーマにしている班が多く、認知という点は大きな課題であることがわかった。私たちは地域と NPO をテーマに学んでいるからこそ、それがなんなのか、どのようなことをしているのか考え理解を深めている。しかし、実際の世間の認知はまだまだである。福祉の充実化が求められるいまだからこそ、NPO の認知は広めていかなければならないと思った。

しかしながら、NPO だけが市民活動の全てではないことも覚えておかなければならないと考える。地域のことについて考え活動しているのは企業や学校など、なにも NPO が全てではない。こうした地域活動に前向きな社会資源を多面的に引き寄せるのもソーシャルワーカーの役割ではないかと思った。

まとめ

私はこの一年間で、企画立て、課題の発見力、それに伴う原因追求という 3 つの点から大きな成長を成し遂げられたことを実感した。そして活動を通し改めて地域と福祉の深い関係に気づけたと思う。だからこそ、いまの地域や市民活動に良さや、地域住民にもっと知ってもらい利用してもらいたいとおもう。しかしながらその前には課題が多い。こうした大きな課題に対し、一年で培った、目の前にある小さな課題の原因をさぐり見ていく力が活かされていくのではないだろうか。

地域にある様々な課題に対して、サービスラーニング全体で身に付けた力で地域を活性化させながら貢献できる人材になれるよう、今後も地域福祉の研究に励みたいと思う。

私がこれから生かしていくもの

社会福祉学部 社会福祉学科 2年 古川俊樹

活動先：特定非営利活動法人ひだまり

担当教員：岡久美子

①私はこの夏のサービスマーケティングを行い、いくつかのものが残った。一つ目はまったく話したことの無い人たちと多少なりとも会話ができるようになったことである。理由としては、私は「ひだまり」に行ったのだが、「ひだまり」の利用者様は全員高齢者であり、当然敬語を使うことや、男性か女性か、や一人ひとりの趣味や性格によって話の内容が変わる。さらに曜日ごとに利用者様も変わってくる。その中で話すのが苦手な私は初日～二日目に苦戦したものの日にちを重ねるにつれて、利用者様の性格や昔何をしてきたか、何に興味があってどういったことをしてきたのかを意識して話すことで、会話が広がっていくのか感じられた。この体験ができたことで、私の中では話すこと＝苦手となっていたが、話すこと＝楽しいかもという風が変わった。これはこれからの人生でも生かせるであろう。

次に学べたことは、私は高齢者の方と話したりするのが好きだということである。これは前々から少し自覚をしていたのだが、今回のサービスマーケティングを行ったおかげで、さらに実感できた。私は子どもが好きでサークルにも入り、かかわっているが、高齢者の方と関わるのは子どもと関わるものと全く違い、学べるものも全く違う。子どもならば柔軟な発想や、夢幻に湧き出る体力、学習意欲だったりするが、高齢者の方から学べるのは、実際に体験した出来事、長い間生きてきて貯めた知識などがある。簡単にいうなれば子どもとかかわるときは体力、高齢者とかかわるときは頭へ様々なものが蓄えられていく。そして、私はいろいろな話を聞くのが好きなので、「ひだまり」の方と話していたらすぐに時間がたってしまうこともしばしばあった。この体験をしたことも高齢者の方と話すことが私は好きなんだということの裏付けにもなると思われる。

次に私は悪い点も気づかされた。それは本当に危なくなった場合にしか動けないということも今回のサービスマーケティング全体を通して分かった。理由としては、前期はゼミ活動に行けていたが、後期になって何度もゼミに行けなかった。これは本当に申し訳ないことだと思う。大学生としては大人の一步手前としては最悪である。サービスマーケティング中は自分が動かないと周りに迷惑をかけてしまうなどと自分から危険信号を感じとって動いていたが、サービスマーケティングが終わったとたんに力が抜けたかのようにゼミを休んでしまった。そして、それが続き、今度はグループをつくる時にゼミに来ていなくて無理やりグループに入り、その人たちに迷惑をかけてしまった。このことに関しては、グループの人だけでなく、先生やサービスマーケティングが一緒になった人にも迷惑をかけたと思う。改善するには、早め早めの危機感を感じ取る方法など、自分に問題点がとてもあることに気付かされた。サービスマーケティングの発表時や、その後の調べ学習では、何とか発表できるころまでまとめることができたが、こんな発表でNPOの人たちが満足いくものではないなと気づかされた。もっと早くに行動していれば、少なくとも、自分では満足のいくものが発表できたのかもしれないと考えると、後悔しか出ないので、次からは、もっと早め早めの行動に移行していくことが、3年4年になるときは必要だと思う。そして、社会に出るときもこの意識を持つことがとても重要なことだと思う。個人じゃなくてグループで動い

ているんだということをもっと意識するべきだと考えさせられた。

②次に活動を通して見えてきた地域の課題について触れていくが、「ひだまり」は様々な事業に関連している。私が「ひだまり」にサービスラーニングに行った際にはまず介護保険事業について、触れさせてもらった。そのあと、「ひだまり」が経営している喫茶「ひだまり」にて少し接客をさせてもらった。まだ体験していない事業はあるが、一つの地域で少なくとも複数の事業をしているということはその地域のことを気かけないとやれないと感じた。子供から高齢者まで、幅広く関わっていく、こういうと簡単そうに聞こえるが、やっていることはとても簡単にはまねできない。私がサービスラーニングとサークルを一緒にやろうとして、サークルの方をないがしろにしてしまったからこそ実感できることだと思う。こういったことができるからこそ、サービスラーニングを受け入れることができ、地域のことも考えることができるのだなと感じた。

一年間ありがとうございました。